

「インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学部1回生 大橋明日香

今回の研修で経験したことや感じたこと（のごく一部）をいくつかの項目に分けて記述していく。

まずはインドネシアでの生活について。日本とは違う点も多く驚かされることもあった。例えば想像以上にトイレの紙がない。紙を流す文化もない。桶から水を汲んで流すタイプのトイレにも遭遇した。知っていても慣れるのは意外と大変である。道を歩く際には、なかなかニオイのドブや舗装がガタガタな歩道も多いので、そういう場所に慣れていない人は覚悟した方がいい。そしてバイクがかなり多い。轢かれることはまずないと思うが、信号や横断歩道が少ないため日本のように安全に歩けるとは思っていないだろう。

言葉の壁も案外大きかった。大学周辺では英語が通じる場所も多いが、少し離れると郊外のローカルな場所という感じなのでほとんど英語が通じなくなる。習ったインドネシア語を使う機会があるという考え方もあると同時に、自分は他の国に行ったことがあったからそれほど困らなかったものの、初めての海外留学先としてはもっと英語が通じたり周辺環境が良かったりする場所の方が良いのではないかと思った。

二つ目はプログラムの内容について。結構がつつりインドネシア語を学ぶプログラムになっていた。このプログラムのための専用テキストもあったし、平日の午前中はひたすらインドネシア語の授業だった。そのおかげで物を買うときに値段を聞いて支払う、大きなショッピングモールで入り口が見つからなかったときに入り口がどこか尋ねる、乗った電車が行きたいところに行くのかどうか聞くなどができるようになり、2週間という短い期間であっても実際に使えるインドネシア語がある程度身についたと感じた。

インドネシア大学の日本学科の学生とは、みんなで昼食をとったり大学とその周辺や観光地を案内してもらったり合同でプレゼン発表をしたりして仲良くなることができた。彼らからインドネシアのことを学び、私たちが彼らに日本のことを多少は教えることもできた（と思いたい）。日本学科の学生はみんな日本語が上手なうえに親切で、とても温かく受け入れてもらったので、恩返しという意味でも京都での受け入れプログラムにぜひ参加したいと思うようになった。

そしてプログラム全体を通して感じたことについて。タイのプログラムに参加したときにも思ったが、やはり個人で旅行するのと勉強しに行くのでは見えるものが違う気がする。現地の人々（特に私たちと同世代の学生たち）と交流することによって彼らがどのような考えを持ちどのように生活しているかを知ること、「郷に入っては郷に従え」という言葉のように現地の感覚で暮らしてみること、現地で現地の言葉を学ぶこと… これらのことはただの旅行ではなかなか経験できないことである。今回の派遣を通して、国際理解において現地の人々と交流することや実際にいろいろな経験をすることがいかに重要であるかを改めて感じた。今後もインドネシアに限らず色々な場所でさまざまな経験を積みたいと思った。

最後になりますが、このプログラムに関わったすべての人々に心から感謝しています。本当にありがとうございました。